

昭和41年度  
(1966)  
第6回大会

男子優勝 旭川北 女子優勝 札幌静修

【 専門委員長 寸評 】

6月25～27日の開催予定だった今年の大会は、降り続く雨のため1週間延期の決定をせざるを得ない状況となった。1週間の延期をした所が、またも雨のため予定したコート使用不能のため、急ぎ会場を札幌中島庭球場に変更して開催せざるを得ない結果となり、当番校をはじめ各方面へいろいろ御迷惑をおかけした点、この紙面をお借りしてお詫びとお礼を申し上げたい。

本道選手の庭球技術が年々向上していることは非常に喜ばしい。特に、男子単・複ともに優勝した杉村(旭北)は全国大会に於いても上位進出の実力を持っている。しかし、全般的には基本技の練習不足が見られる。半年の雪中生活に於いて、基本技及び試合運びに技術向上を計ろうとするならば、短時間の練習では不可能であろう。種々の基本技のためにすら十分な練習時間は取り得ない現状の中で、いかに効果的練習計画を確立するかが、勝敗を決するものといえよう。一方で、冬季間の練習確保の件である。高体連加入6年目のまだ若い種目であるだけに、各校に於いて困難な問題が多々あることと考えられるが、本道に於いても充分力のある選手がいるのである。

男子、杉村(旭北)をはじめ、宮原(旭北)、工藤、鈴木(札西)木村、松井(樽潮)。

女子、北山、福山(静修)、綾部(樽千)、岸田(樽商)等。単・複ともに本道のレベルアップを認識させてくれた選手である。彼等には今後も本道を代表する選手としての道は自ずと開けるであろうが、一層の努力を期待する。

全国大会に於いては1回勝つことが困難なことであるが、今年は女子単で福山(札静修)が2回戦に進出。また男子複で杉村・小林(旭北)が2回戦へ進出。そして特記すべきことは、男子単にて、杉村(旭北)は4回戦への進出を果たした。道庭球界にとっても非常に喜ばしいことである。

また男子複木村・松井(樽潮)は1回戦で敗退したとはいえ、優勝した森・宮下(静岡)に対して勝利を思わせる戦いをし、関東、関西勢も本道テニスに再認識したことである。

(専門委員長 佐藤 功)

# 優勝のよろこび

男子 旭川北高等学校

「全道大会の団体戦は絶対とろう」

今年のチームが何とか形成された去年の11月頃、言うとはなしに皆の心に盛り上がっていた言葉です。この頃ちょうど、テニスもシーズンオフに入る時期でしたが、来年の栄光を勝ち取るために、部員一同心を一つに努力し、且つ精進しました。部員の中には早くも全国大会の夢を語る者、シングルス初優勝を目指す者、みんなやる気充分でした。年も迫り練習もかなりハードになっていきました。日曜日には小学校の体育館を借りて技術面に力を注ぎ、平日には基礎体力であるランニング、柔軟体操に専念しました。ある時は、長グツを履き雪の中を走り、又ある時は練習ゲーム中のダブルフォールの数だけ体育館の回りをうさぎ飛びで回らされたり、毎日体の休まる暇がありませんでした。このような練習が、シーズンの始まる4月下旬まで続きました。

しかし、我々には、シーズンが始まる前にしなければならない重大な事がありました。それは硬式庭球同好会をクラブに昇格してもらうことでした。我々にとってはこの事は、全道1になること以上に重大な事です。39年度以来、クラブ昇格運動を続けて来たのですが、あいにくその年は実績不足で認められることができませんでした。しかし、去年は同好会でありながら全道大会初出場で団体第2位、個人シングルス、ダブルスに優勝という実績を残し、それらがやっと認められ、3月の職員会議においてわれわれの念願であったクラブ昇格が果たされたのです。この時ばかりは、皆手を取りあって喜びました。

待ちに待った日が来ました。6月26日、我々の今までの苦労がみんな実った日、そうです。第6回全道高校選手権大会の団体決勝の日です。

対するは、小樽商業高校。地元の利を生かし勝ち進んできただけあってなかなか強敵です。いよいよ試合開始、3面のコートに、No 1、No 2、ダブルスとそれぞれ同時に入り始めました。僕のNo 1同士の試合が一番先に決まりました。まず1点。続いてNo 2の試合が終わりました。無念にも敗れました。これで1対1です。残すダブルスに勝敗がかけられました。北高ダブルスはかけ声勇ましく相手を追い込みます。そして最後のポイント。マッチポイントを握ったのです。決まりました。勝ったのです。遂に僕等は、第6回全道高校庭球選手権大会団体の部で優勝したのです。うれしかった。とにかく去年以来の念願を果たせた喜びでいっぱいでした。思わずみんなかけよりました。おまけに、この後、行われた個人戦のシングルスもダブルスも優勝できこれでわれわれはまったく完全優勝。本当に”しあわせだなあ”です。

その晩、部員一同優勝の感激と旭北硬式庭球部の輝かしい歴史の1ページを我々の手で築くことが出来た光栄の喜びをわかち合いました。そして話は、8月1日より秋田で行われる全国大会へと移っていました。

(旭川北高校 杉村 潤)

# 優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

”優勝”、我々はこの言葉を目標にクラブ員全員が一心同体になって練習をして来た。はたして今年はその努力と根性が報いられるであろうか不安でならなかった。その不安をもち続けたまま我々は試合に挑んだ。いざ試合になると緊張のあまり不安など吹き飛んでしまい、「精一杯戦って負けたのならしかたない。ただ思う存分相手と戦うのだ」と頭の中で繰り返しながら一心にボールを追い続けたのだった。

第1戦、強敵の札南校との戦いだった。その試合はとても苦しかった。まして勝とうなどということはこれっぽっちも考えなかった。しかし皆なよく戦い、毎日の練習の成果をフルに生かし、D・S1・S2共に勝つことができた。この第1戦が皆の自信となり、後はトントン拍子で他校に勝って行った。しかも結果は完全優勝に終わった。この様な結果は夢にも思わなかったことである。我々がこの様な勝利を得た原因はどこにあったのだろうか。もちろん不断の苦しい練習の積み重ねもあるが、一番大きな原因となるのは精神的な問題である。

前にも述べた様に相手がどんなに下手であろうと上手であろうと、決してなめてかかってはいけない。又相手が強くても消極的になってはいけない。この様な心構えが良い成績を納めたのだと思う。そして、この様な精神力はわれわれだけで造り上げたのではない。そこには顧問佐藤先生を始め諸先輩などの良き指導のもとで養われた貴重なものなのである。今さらながらも先生、諸先輩には深く感謝している。我々はこのような良き環境のもとでこれからも一層の努力をし、一步一步前進してゆきたいと思っている。

(札幌静修高校)

全国高校総体（第56回全国高等学校庭球選手権大会）

秋田